校長室便り

（文　責）
ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義

全力でのぞむことの大切さ

１人でも黙々と取り組む３年生

今日・明日と中学部は第２学期の中間テストが行われます。中学部の生徒にとっては、これまでの学習の定着度を自分自身が確かめるためにも、とても大切な２日間です。

小学部も単元が終わるごとに単元テストが行われますが、それに比べて中学部の定期テストは、ずいぶん範囲が広いので計画的に復習をしていくことが求められます。

「テスト」を話題にするとき、私はいつも同じことを考えます。それは、どんなテストであっても「どれだけ準備をしてのぞんだか」ということです。結果はもちろん大切ですが、結果以上に大切なことではないかと思っています。

テストで分からなかった・あるいは間違えたところが、自分にとって理解できていなかったり定着していなかったりした部分であり、そこを確実に自分のものにして進めるためにテストはあるのだと考えます。結果は良いに越したことはありませんが、「テスト後の見直し」は結果以上に重要だということです。

結果だけにこだわると、とかく他人と比較したものの見方しかできなくなってしまいます。自分を見つめる方法として、確かに他人と比較してみなければならない場合もありますが、自分の中で「自分は全力でのぞんだかどうか」という見方ができるようにすることが、私はとても大切だと思っています。

それはテストに限らず、作品作りや発表などにおいても同じです。テストの点数や作品の良し悪しは、まず自分がどれだけ一生懸命取り組んだかが問われるべきです。そこをきちんと評価していかなければ、子ども達も結果だけしか見なくなってしまいます。

そうは言っても、本人でさえ全力だったかどうかが分からないことがあります。そのときに、子どもの努力を認めより良い方向へのアドバイスを与えることができれば、きっと意欲を高めることができるのではないかと思います。

テストにのぞむ中学部１年生

張り詰めた空気を感じた２年生

久しぶりの「全校昼食」

先週の水曜日に、今学期初めての「全校昼食」がありました。人数が増えた関係で机・いすが足りなくなり、なかなか全員が集まってお弁当を食べることができませんでした。

しかし全校昼食は、小規模校だからできることです。みんなで楽しく同じ時間を過ごすための方法を、昼食美化委員会を中心に考えた結果、子ども達に敷物を持ってきてもらい、それを教室側のホールに広げてみんなで一緒にお弁当を食べることになりました。

今回は血液型で集まってみたところ、それぞれの場所でずいぶん話が盛り上がっていました。何となく遠足にでも出かけているような雰囲気でした。

久しぶりで、今まで以上に楽しそうに食べている子ども達の表情が、とても印象的でした。これからもこういう機会を大切にしたいと思います。

楽しく過ごした「全校昼食」

校長室便り

（文　責）
ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義

真剣に課題に取り組んでいます

困難なことにこそ…

昨日は中学部の中間テストにあわせ、全力でのぞむことの大切さを書きました。今日は自分にとって困難なことに対して、どう対応するかということを考えてみます。

人間は誰にでも得意なことがあれば苦手なことがあります。得意なことに対しては意欲的に取り組めますが、苦手なことはできるだけ避けたいと消極的になってしまいます。これは子どもだけでなく、大人にとっても同じことです。しかし苦手なことに対してどう取り組むかは、その人の考え方や生き方にまで関わってくるものなのではないかと思います。

子ども達を指導してきて気になっていることは、以前に比べてずいぶん諦めの早い子どもが増えてきたと感じることです。「もう少し頑張ればできるようになるよ。あと少しで乗り越えられるよ。」とこちらが励ましても、自分で無理だと判断するとそれ以上の努力をしなくなるのです。それ以後は、もう挑戦してみようとさえしなくなってしまうのです。

努力した量や時間に比例して、すぐに結果が現れれば良いのですが、学習に限らず運動でも、目に見えて力がついているのに気がつくのは「ある日突然」ということが多いのです。そこまで粘り強く頑張ることができなくなっている子どもが増えているように思われるのです。

そうなった原因が何かはよく分かりません。しかし幼いときから、自分の力で小さなハードルを越えるという経験をしてきたかどうかが、ずいぶん影響しているのではないかと思います。

努力を測る物差しはいろいろありますが、その中である程度「時間」をかけられるということは、やはり大切だと思います。特に自分にとって困難なことに対し、簡単に諦めず繰り返し挑戦できるようにすることは、そのまま「生きる力」を育てることになるのではないかと私は考えます。

縄跳びに挑戦する低学年

４人のドライバーさんをお知らせします

２０日・水曜日からスクールバス４台体制で運行します。予定表を配布しましたのでご確認をお願いいたします。

○○○○
車両〔 NISSAN CIVILIAN 〕

○○○○
車両〔 TOYOTA HIACE 〕

○○○○
車両〔 TOYOTA HIACE 〕

○○○○
車両〔 TOYOTA COASTER 〕

校長室便り

（文　責）
ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義

「ハッピーのおくりもの」

今日の午前中、学校宛てに日本からＥＭＳ（国際スピード郵便）で本が送られてきました。送り主の名前を見ても心当たりがありません。封を開けてみると、中には「ハッピーのおくりもの」という題名の本が２冊ありました。私宛ての手紙も同封されていましたので、一部を紹介させていただきます。

『同封させていただきました本ですが、私の息子が小学４年生の時に同級生が保護した９匹の捨て犬がいました。５匹は同じ小学校の子ども達の家で飼われることになり、我が家で飼われることになったハッピーの持病に四苦八苦しながら命の終わりを見届けました。

動物を飼えば、病気や怪我、避けられない死、最期まで責任を持って飼うには様々な問題に直面いたします。当時息子がつけていましたハッピーの成長日記を元にまとめた物です。

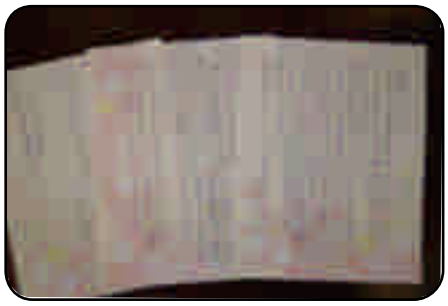
海外で動物を飼うことは難しいと思いますが、命の尊さを考えるきっかけになればと寄贈させていただきたいと思いました。つたない素人の本でご迷惑かもしれませんが、図書室の片隅に置いていただけましたら幸いに存じます。

遠く日本より児童の皆様の健やかな成長をお祈り申し上げます。

１０月１４日　湯山幸枝　』

以上のようなお手紙でした。

届いた本と同封されていた手紙



良い本をたくさん読んで!!

贈られてきた本を、早速読ませてもらいました。捨て犬を家族同様に育て、最期の時までずっと温かい愛情で接してこられたご家族に、頭が下がるような思いでした。またハッピーが亡くなる場面では、熱いものがこみ上げてくるようでした。

この本は、子ども達にぜひ紹介し読ませたいと思いました。きっと命・優しさ・責任感というようなものを考えるきっかけになると思います。

全く縁もゆかりもないこの学校に、わざわざ日本から本を届けてくださった湯山様に、心からお礼申し上げます。

ありがとうございました。

明日からスタート「スクールバス４台体制」

昨日お知らせしましたように、明日からスクールバス４台体制での運行を開始いたします。

それにあわせて本日、中間休みを利用して子ども達にも指導をいたしました。登校はいつも同じ車であること、下校は曜日によって車が異なる場合があること、備え付けのエチケット袋のことなど、担当から説明がありました。

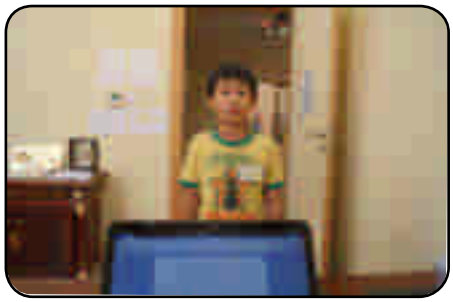
バスを増やすことに加えて、登下校の配車を別々に考えることで、少しでも子ども達の乗車時間が短くなればと配慮していただきました。

しばらくは戸惑いがあるかもしれませんが、学校でも十分に気をつけていきたいと思います。なお、昨日配布したものにミスプリントがありましたので、訂正したものを改めて配布いたしました。

バスごとにメンバーを確認

校長室便り

（文　責）
ドーハ
日本人学校
校長
酢谷昌義


帰国前に暗誦を済ませました

暗誦文化は重要な生涯教育

最近、斎藤孝さんの「声に出して読みたい日本語」を読み返していて、とても参考になる部分があったので紹介します。

詩は、朗誦したり暗誦したりすることにこそ魅力がある。意味を優先させるあまりに、小中学校の国語の教科書には簡単なものしか載せなくなってきている。日本語を体得するという観点からすると、子どもの頃に名文と出会い、それを覚え、身体に染み込ませることは、その後の人生に莫大なプラスを与える。

文章の意味はすぐに分からなくてもいい。長い人生のプロセスの中で、ふと意味の分かる瞬間が訪れればいい。こうしたゆったりとした構えが、文化としての日本語を豊かにする。暗誦が衰退した背景には、暗誦文化が受験勉強の暗記と混同されたという事情がある。覚えること自体が人間の自由や個性を阻害するものと思い込まれた。これは言われなき混同である。暗誦は、些末な知識の暗記とは全く異なる文化的営為であるからだ。

いろんな本から選ぶ「今月の詩」

暗誦文化は、型の文化である。型の文化は、強力な教育力を持っている。一度身につけてしまえば、生涯を支える力となる。日本語の感性を養うという観点から見れば、暗誦に勝るものはない。最高のものを自分の身の内に染み込ませることによって、日本語の善し悪しが感覚として分かるようになる。

幼い頃に、意味の分からない文章を覚えさせるのは拷問とも言える強制だという考え方がある。私はこうした考えに与(くみ)しない。できるだけ早い時期に最高級のものに出会う必要があるとむしろ考える。意味が分かるのは後からでもよい。たとえ意味がわからなくとも、その深みや魅力は伝わるものだ。よしんばそのときに魅力を感じなかったとしても、後年それを覚えたことに感謝する時がくる。また、それだけの魅力を持ったものが、暗誦・朗誦される価値を持つ。

優れた日本語をリズムとして自分の身体に染み込ませていくと、その後には自分の潜在的な日本語力はアップしている。優れた音楽が感性として身についている人が、できの悪い音楽に耐え難さを感じるように、優れた日本語を身体に技化(わざか)した人においては、日本語を評価する基準は高くなる。

最高のものを型として反復練習し、自分の技として身につける。このことは教育の基本である。ある程度の強制力を持ってでも伝え、身につけさせなければならない。生涯にわたって意味を発し続ける豊かな文化を、身体に技として染み込ませるだけの意志の強さと迫力が、教師には求められる。

今月の詩の暗誦は、すでに２０人以上の子どもが済ませました。どの子も校長室でとても上手に暗誦して見せます。多少難しいものでも、子ども達は１か月もあれば見事に暗誦しいつも驚かされています。

斎藤さんの指摘は、私達教師が忘れてはならないことだと思っています。最高のものを身につけさせることを、常に考えていきたいと思います。

「身につけさせたいこと」いろいろ